

ロバート・ウォーレスにおけるミクロ経済論

—市場の役割と均衡理論—

The Microeconomic Theory in Robert Wallace: The Role of the Market and Equilibrium Analysis

中 野 力

Robert Wallace discusses his microeconomic theory in his work 'Of the Prices and Dearth of Provisions in different Numbers Referring to One Another'. My impression, however, is that he discussed economic theory in general, but he hardly described microeconomic theory.

This essay of Wallace addresses the Corn Laws. In presenting Wallace's position on various components of the Corn Laws, he demonstrated a command of the benefits of competition, of partial equilibrium analysis, and of the self-regulated nature of general equilibrium analysis.

Wallace believed that the price of people's subsistence was too important to be solely determined by market forces. He desired low prices for foodstuffs in order to keep the cost of maintaining a family and the price of labor low. Markets could not be counted on to provide stable, low prices: market prices were too erratic. On this basis, he supported government intervention. He recommended that export subsidies on grain be suspended when prices rose above a certain level.

Wallace's economic theories were mainly discussed in *Characteristics of the Present Political State of Great Britain*. Thus, most researchers of Robert Wallace did not pay attention to this essay. Though Wallace was one of the most important economists before Adam Smith, the research on his economic theory was not enough. This essay throws light on Wallace's economic thought.

Tsutomu Nakano

JEL : B31

キーワード : ミクロ経済論、独占、価格、奢侈、代替効果、均衡分析、政府、市場

Keywords : microeconomic theory, monopoly, price, luxury, substitution effect, equilibrium analysis, government, market

1. はじめに

ロバート・ウォーレス (Robert Wallace, 1697-1771) は牧師としてスコットランド啓蒙の中心的人物として活躍してきた。しかしながら、ウォーレスの特徴は、牧師でありながら経済論をも展開してきたことにある。その当時の主流な知識人であった牧師が経済論を展開するのはまれであった。

先行研究でもウォーレスの経済論が無視されたわけではなく、それなりに注目を浴びてきた。しかしながら、その研究はウォーレスの『グレート・ブリテンの現在の政治的状况についての諸特徴』(Wallace 1758, 以下『諸特徴』と略す) が中心であった。この著書の中で、ウォーレスは銀行や国債など多岐にわたって経済論を展開しているが、ミクロ経済についての視点は乏しかった。ピータスはウォーレスの「相互に関連するさまざまな数のもとの、食料の価格と食料不足について」(Wallace n.d.2, 以下「食料の価格と食料不足について」と略す) という草稿を考察しながら、ウォーレスのミクロ経済論について論じている。ピータスの貢献は、これまで注目されなかった草稿を取り上げ、ウォーレスのミクロ経済論を論じたことにある。本稿ではピータスの議論を参考にしながら、ウォーレスの「食料の価格と食料不足について」を考察し、ピータスの議論の妥当性について考察していく。

2. 「食料の価格と食料不足について」

ウォーレスは「食料の価格と食料不足について」をそのまま出版するつもりはなく、著書である『すべての真の愛国者たちへの忠告、もしくは、グレート・ブリテンの栄光を促進するための提言¹⁾』に挿入するためのものとして執筆した。しかしながら、この著書は現在残されていないため、研究が行われておらず、その内容がどのようなものであったのかを知ることはできない。

1) *Advice to all true patriots or proposals to promote the Grandeur of Great Britain*. 以下、『すべての真の愛国者たちへの忠告』と略す。この作品はエディンバラ大学所蔵のウォーレスのカatalogueの中にはないが、ウォーレスの書簡 (Wallace n.d.1 に所収) でこのタイトルが見られる。ウォーレスは手紙の中で、この作品を詳細に説明しており、また手紙の後には、この作品の概要を作品の頁を付けて紹介している。この手紙は、手紙と作品の説明の両方とも6枚ずつの、計12枚からなっている。

「食料の価格と食料不足について」はいつ執筆されたのかわからない。ピータスはディヴィッド・ヒューム（David Hume, 1711-1776）の書簡集から、「食料の価格と食料不足について」が執筆されたのは、おそらく 1767 年であろうと考えている²⁾。

「食料の価格と食料不足について」の始めに、以下の文章が記されている。

「ここでのもろもろの考察は優れたものであり、そのすべてではないけれども、そのほとんどが、私の『すべての真の愛国者たちへの忠告』に適切に挿入されたものである。

しかしながら、さらには、これらの考察は、これらの主題についての考察である雑多な論文集として出版されるであろう」（Wallace, n.d.2, p.1）。

ピータスはこの文章から「食料の価格と食料不足について」が『すべての真の愛国者たちへの忠告』が執筆された年くらいに書かれたものと考えている。そしてピータスは『すべての真の愛国者たちへの忠告』が書かれたのはヒュームの手紙から 1767 年だと考えている。

「拝啓

著作のこの概要に異論を唱えることは確かに誰にもできないことでしょう。そこに含まれる誤りをあえて見つけ出そうとする人こそまさに揚げ足取りをする人に違いありません³⁾。この概要の熟読を私に許して下さったあなたに、心からのお礼を添えて、この概要をお返しいたします。私はこの概要をすぐにお返しするべきだったのですが、あまりにも細かい文字で書かれていますので、それを読むのに苦労しましたし、それを十分に理解するためにはかなりの時間が必要でした。あなたの御子息によりしくお伝えください。そしてあなたに心より感謝しております。

2) Peterson (1994), p.202.

3) ここに編者注がつけられ、この著作がウォーレスの『すべての真の愛国者たちへの忠告、もしくは、グレート・ブリテンの栄光を促進するための提言』のことであると記されている。

敬具

ディヴィッド・ヒューム

1767 年 12 月 15 日ロンドン

エディンバラの牧師であるロバート・ウォーレス師へ

ヒューム」(Hume 1932, II, pp.173-174)。

「食料の価格と食料不足について」が『すべての真の愛国者たちへの忠告』に挿入されたと考えられることから、ピータスンは「食料の価格と食料不足について」が執筆されたのは 1767 年くらいと考えている。確かにこの手紙だけを読めば、1767 年 12 月 15 日と記されているので、「食料の価格と食料不足」が『すべての真の愛国者たちへの忠告』に挿入されることを意図されていたことから、1767 年近くに執筆されたように思われる。しかしながら、この年は『すべての真の愛国者たちへの忠告』についての年月であり、「食料の価格と食料不足について」の年月ではない。

『すべての真の愛国者たちへの忠告』に関する記述がウォーレスの別の草稿に出てくる。それが、ウォーレスが 1745 年に執筆した「スコットランドのジャコバイト達への忠告——革命とプロテスタント系国王の確立とに黙従するよう彼らを説得するために提示された諸理由の中でも、とりわけスコットランドが革命以後富を減じているのではなく、その当時に比べて現在の方が豊かになっていることを証明する——」(Wallace 1745, 以下「忠告」と略す)という草稿である。ウォーレスは 1764 年に草稿の大半を見直し、最初にコメントをつけている。「忠告」につけられたコメントは以下のものである。

「1764 年 11 月？金曜日

特にグレート・ブリテンと関係を持つ、貿易、製造業、農業、そして商業についてのいくつかの論考は、どのような国内政策が一国の富と住民を増加させるのに最善であるかを示している。これらの論考はこれらの論題を考察する人々にとって、また私がこれらの論題についての見解を再び取り上げることがあれば、私にとってさえも有用なものであるだろう。

ここでのいくつかの意見は、1768年2月にこれらの主題についての考察である雑多な論文集に収録されて出版されるかもしれない。

ここでのいくつかの論考は、『人類の数についての論考』(*Dissertation on the numbers on mankind*)、『諸特徴』(*Characteristics*) および『すべての真の愛国者たちへの忠告』(*The advices to all true patriots*) という私の三つの作品と関連を持つものである」(Wallace 1745, p.2)。

この文章で1768年2月という年月が記されている。しかしながら、これは『すべての真の愛国者たちへの忠告』を意味するものではないであろう。「食料の価格と食料不足について」の1頁の文章に記されている⁴⁾ 論文集と同じものだと考えられる。この文脈からして、論文集が『すべての真の愛国者たちへの忠告』とは考えられないであろう。

ここで問題となるのは、1764年の記述ですでに『すべての真の愛国者たちへの忠告』というタイトルが記載されていることである。1764年の時点ですでに『すべての真の愛国者たちへの忠告』というタイトルが記載されているので、1764年以前にはすでにほとんどの内容が出来上がっているように思われる。このことから判断すると、完成したのは1767年かもしれないが、すでに1764年には大分のものが出来上がっていたのかもしれない。そうすると、『すべての真の愛国者たちへの忠告』が1767年に完成したとしても、「食料の価格と食料不足について」も1767年ごろに完成したとは限らないであろう。『すべての真の愛国者たちへの忠告』が出版されたのかどうかもわからない。もしこの著作が完全なままで発見されればウォーレス研究にとって大きいのであろうが、残念ながら現状では可能性が低い。しかしだからこそ、この『すべての真の愛国者たちへの忠告』と関連を持つ「忠告」や「食料の価格と食料不足について」というウォーレスの草稿を研究することは、ウォーレス研究にとって重要となるであろう。

4) 本稿3頁の引用文を参照。

3. 「食料の価格と食料不足について」にみられるウォーレスの ミクロ経済論

3-1 独占

「食料の価格と食料不足について」の主要な論題は穀物論争をめぐるものである。食料は大切なものであるゆえに、市場だけに任せることができないのか、それとも食料であっても市場に任せるのが最適な結果を生み出すことになるのか、という議論である。ピータスはウォーレスのこの議論を用いながら、ウォーレスのミクロ経済論を展開する。

最初に議論の対象となるのが独占の問題である。アダム・スミス (Adam Smith, 1723-90) は『国富論』で独占の問題について論じた。スミスは保護された市場とは、商人と職人が団結したり、カルテルを行うことが簡単であるとする。それは農民が享受できない利益であった。

「同業者たちは楽しみや気ばらしのためにさえ、まれにしか集まらないが、会話は社会にたいする陰謀、すなわち価格を引き上げるためのある種の計略に帰着する。たしかにそうした会合を阻止することは、実地可能な法律によってであれ、自由と正義に合致する法律によってであれ、不可能である。しかし法律は同業者たちがときどき集会することを妨げえないにしても、そうした集会を助長したり、ましてや必要なものとしたりするべきではない」(Smith 1767, I, p.145, 邦訳 第1巻、226-227頁)。

スミスは商人たちを全面的に信用することはなく、談合し、自分たちの有利となるように仕組むことをもくろむと考える。このような商人への不信はウォーレスにも同様にみられる。

「食料を貯蔵し、市場から食料を締め出すことについて

そのようなことが可能である、ということは、何世紀にもわたって、推測、想像されてきた。なるほど確かに、農民や穀物問屋や穀物商人や肉屋や牧畜業者、および、ほかの種類の食料の商人が、どのようにしてこの目

的のために談合するかを考えるのは容易ではないけれども、もし彼らが豊かであり、購買するための多くの貨幣および信用があり、自分のお金を長期間手放す余裕があるならば、このことはそれなりに、いや、とても頻繁に行われるだろうと私は考える。この目的のために、数多くの公式な会合は必要ない。これらの人々はしばしばお互いに偶然に出くわすし、仕事に従事していれば出くわすことになる。彼らは多くのやり方で協議し、お互いに情報を伝え、与えられた知らせは、彼らの間で素早く広がるであろう。このようなことが現実には生じ、価格を上昇させ、またこの時期に行われている、ということを私は疑わない。

どのようにすれば、法律によってこのことを防ぐことができるのか、ということは私にはわからないし、この種の事柄は、あらゆる法の網をくぐることが常に可能であるだろう。どのようにすれば、中間商人の人々が食料を販売するのを防ぐことができるのか、ということは私にはわからないし、食料が繰り返し販売されるのを防ぐことができるのか、ということも私にはわからない。牧畜業者や商人たちに、直接にロンドンやほかの大都市の市場に彼らのあらゆる財を持ってくるように義務づけることはできない。だから、多くの財を持っているたくさんの豊かな商人がいるに違いない」(Wallace n.d.2, pp.6-8, cf. Peterson 1994, p.204)。

かくして、ウォーレスもスミスと同じように、商人に対して不信を抱くことになる。

3-2 価格論

次にウォーレスの価格論に移る。ウォーレスは需給関係から価格が決定されると論じる。

「確かに価格は販売者の数によってではなく、販売量と購入者の数によって調整されるのではあるけれども、販売量が一定である時でさえ、それがごく少数の人々の手にあるのか、とても多くの人々の手にあるのかという

ことが、ある程度は影響を与えるのである」(Wallace n.d.2, pp.19-20, cf. Peterson 1994, pp.204-205)。

ウォーレスの価格決定論はほかの著作では見られない。この草稿ではウォーレスは価格が需要と供給によって決定されると述べている。

しかしながら、食料の市場においては需要の大小はそれほど大きく変わることはない。むしろ変化するのは天候による豊作や不作など供給側であった。

「穀物や家畜にとっての悪い季節について

疑いもなく、雨がほとんど降らなかったり、大雨が降ったり、荒れ模様の季節は、不作になったり豊作になったりすることで、価格を上昇させたり、適切なものにさせることに、大きな影響を与えるであろう。

特に、草がほとんどないところでは、牧畜業者は自分の家畜を殺すか、安い値段で売ってしまわなければならない。なぜなら、彼らは家畜に食べさせることができないからである。家畜の数が回復したり、以前の数に戻るようになるには、ある程度の時間がかかるであろう。おそらく、現在の家畜や肉の不足や値段の高さは部分的にはこのことに、そして、数年前の有角動物の死に帰せられるだろう」(Wallace n.d.2, pp.16-17, cf. Peterson 1994, p.206)。

食料の価格を安く抑えるには、多くの食料を市場に流通させることが必要となる。この見解に基づき、家畜として穀物を食する馬や牛を減らせば、その食料を人間に回すことができるので、穀物を食べる動物ではなく、草を食べる動物を家畜として用いることが勧められる。

3-3 奢侈

食料の増産を重視するウォーレスのこの議論は奢侈品にも用いられる。

「奢侈品が増加することでの食料品への影響について

最も必要で最も重要な食料品を豊富に獲得するために必要な労働が、これらの奢侈品を作製し、獲得するために使われるようになるにつれて、その影響が大きくなり、より必要な食料品を獲得するための注意がさほど払われなくなると、食料品は一層不足し、高価となる」(Wallace n.d.2, p.14)。

奢侈品が増大することは、奢侈品を作るために使われる労働が増大することを意味する。それは農業者が職人になることであり、食料の減産を意味していた。

「交易をおこなう町や村での製造業の増加は食料不足の大きな原因の一つである。なぜなら、これらの町では食料⁵⁾のためのとても大きな需要が存在するからである」(Wallace n.d.2, p.28, cf. Peterson 1994, p.205)。

このように食料の増産を主張し、奢侈品を生み出す製造業を批判するのは『古代および現代の人類の数についての論考』(Wallace 1753, 以下『人口論』と略す)と類似している。かくしてピータスは、奢侈品は怠惰と結びつき、その怠惰が食糧不足をもたらすとして、ウォーレスが奢侈品を批判的に考えていたと理解している⁶⁾。しかしながら、人口を増加させるために食料の増産を主張した『人口論』でも、その実は製造業に対して一定の評価が行われているように、ピータスは主張していないが、「食料の価格と食料不足について」でも、ウォーレスの奢侈論は両義的である。

「子牛と子羊を殺すことについて

これまでにたびたび述べられてきたように、奢侈は多くの場合において、疑いもなく、良い影響も悪い影響もある。私たちはたくさんの子牛の肉や子羊を時として食べてきた……」(Wallace n.d.2, pp.17-18)。

5) ピータスは providing としているが、provisions の誤りであろう。

6) Peterson (1994), p.205.

3-4 代替効果と均衡分析

次にウォーレスの代替効果に移る。

「小麦の増加は輸出補助金が理由であるといわれており、そしてこのことは部分的には真実である。しかしながら、次のように考えられるのではないだろうか。すなわち、確かに小麦は大いに少なくなっており、値段が高くなっているけれども、このことはほとんど感じられないと。なぜなら、大半の人々は、ライ麦や大麦やオート麦をもっと用いているからである」(Wallace n.d.2, p.16, cf. Peterson p.206)。

ピータスンはこの引用文からウォーレスが代替効果を考えていたと述べている⁷⁾。次の文章も同様に代替効果を論じていると考えてもいいであろう。

「私たちが一ブッシェルの小麦が六シリングだと価格が高いと思わないときに、小麦を輸出するための奨励金が最初に与えられた。そして今や私たちは多くのお金を持っているのに小麦が高価になっていると考える。私たちはどのようにしてこれを説明することができるだろうか。小麦が用いられることはほとんどなく、小麦はいわば奢侈品となっている。六シリングを払う余裕のある人は小麦を使用するが、ほかの人たちはライ麦やほかのもので生活するのである」(Wallace n.d.2, p.20)。

ウォーレスは麦を例にとり代替効果を論じる。小麦の値段が上昇すると、人々は小麦を用いなくなり、ライ麦やオート麦などを用いて、その代わりとする。このような代替効果という複数の財の相互関係を論じることにより、ウォーレスは一般均衡理論を論じることになるけれども、真の一般均衡理論を論じることにはなかったとピータスンは考える⁸⁾。ウォーレスの均衡理論は二財など、少数の財の延長上で論じられるものであり、その基本は一般均衡分

7) Peterson (1994), p.206.

8) Peterson (1994), p.206.

析ではなく、部分均衡分析であるといってもいいであろう。

3-5 政府と市場

ウォーレスは代替効果や均衡分析を論じることによって、市場の力を主張する。しかしながら、このような市場の役割に信頼を置くものではなかった。家族を養うための費用や、労働の賃金を抑えておくようにするために、彼は食料の価格を抑えることを望んだ。市場は安定した安価を提供することを当てにできなかった。市場価格はあまりにも不安定であった。この観点に基づいて、彼は政府の介入を支持することになる。価格がある一定水準を上回った時には、穀物の輸出補助金を停止することを彼は勧めた。

「我々の製造業のためにも穀物は安く保っておくべきものである。……。奨励金を与える代わりに、穀物が法律によって規制されるべき手ごろな価格を上回ったときは、黙って輸出を見過ぐすべきでは全くない。なぜならば、政府が注意を払うべき最も重要なことは、労働者のために十分な食料を確保することだからである。ある場合を除いては、輸出を奨励したり、認めたりするのは、危険なことである」(Wallace n.d.2, pp.5-6, cf. Peterson 1994, pp.208-209)。

ウォーレスは食料を確保するために、政府の介入を必要とする。このような議論は珍しいものではなく、穀物市場への介入を主張する人物は多くいた。しかしながら、ウォーレスが彼らと違うのは、ほかの人物は穀物市場を例外とみなしたのに対して、ウォーレスは穀物市場に限らず、全体的に政府の介入を良しとしたということであるとピータスは主張する。

「不完全競争の問題をウォーレスが認識していたにもかかわらず、市場の失敗に彼の市場への疑いのすべてを帰すことは誤っているだろう。完全な競争市場によって特徴づけられる世界においてでさえ、ウォーレスはレッセフェールを提唱しなかったであろう。そのことは、彼が完全雇用を生み

出す市場の能力を疑ったということ——[ジェイムズ・]ステュアートの場合がそうだったように——ではない⁹⁾。ウォーレスの市場の問題は本質的には道徳的なものである。社会はその資源を生産のためにささげるところの財を、彼の理想主義が客観的に定義するように導いたのである。彼にとって、墮落が原因で、誤った財——奢侈品——の生産を市場が割り当てるものであった。彼は食料価格を低くしたかったし、生産要素を食料の生産につぎ込むために介入を望んだ。古代の簡素な時代とは異なり、食料はあまりにも高すぎると彼は信じていた。それゆえ、ウォーレスは食品産業内においての割り当てを市場が決定することを提唱したものの、彼は社会的水準においての割り当てを市場が決定することを支持しなかった。ウォーレスは市場が価格を決定することは好んだが、彼はどんな市場が存在するのかを定義しなかったのである」(Peterson, 1994, pp.210-211)。

ウォーレスは人口増加を望ましいと考えていたし、そのためにはどうすれば食料を増産できるか考えていた。ウォーレス研究は時としてそのようなウォーレス像が強くなり、彼の奢侈批判を強調する傾向にある。確かに彼は農業が一番重要な産業と考えたが、製造業を全面批判したわけではない。製造業や奢侈にも一定の評価をしている。奢侈をめぐるピータスンの議論をそのまま肯定するわけにはいかないが、それでもピータスンが「食料の価格と食料不足について」を考察し、ウォーレスのミクロ経済論を論じた意義は大きいであろう。

ピータスンはウォーレスの経済論に次のような評価を下している。

「この試論[「食料の価格と食料不足について」]では穀物法が論じられている。穀物法の様々な構成要素について自分の立場を示す際に、ウォーレスは競争の利益、部分的均衡分析、および、一般的均衡分析の自動調節の

9) ピータスンはここに脚注とつけ、以下のように述べている。この問題は Salim Rashid の “Smith, Steuart, and Mercantilism: Comment,” *Southern Economic Journal* (January, 1986), p. 844 でまさに扱われたものである。

性質について把握する力量を示した。ウォーレスが分析を行うときの手際よさと、彼が読者から予期したところの熟知が、市場作用の理解についてのアダム・スミスの貢献の独創性に疑いを抱かせることになるのである¹⁰⁾。

市場の作用についてウォーレスは熟知しており、政策を正当化する際には、彼は意識的に経済的推論を用いたにもかかわらず、自由放任市場 (unassisted markets) には信頼を寄せることは無かった。

……。機能している市場についての彼の記述は、スミスと同じくらい優れたものである」 (Peterson 1994, p.202)。

4. 終わりに

ロバート・ウォーレスの作品として「食料の価格と食料不足について」という草稿がある。この草稿はこれまで注目されなかったが、ピータスンが考察し、その穀物法の議論を、ミクロ経済学から論じている。これまでウォーレスのミクロ経済論については全く考察されてこなかっただけに、ウォーレス研究にとって非常に斬新なものであった。

ピータスンはウォーレスのミクロ理論を高く評価している。ウォーレスの価格決定論、均衡分析などを論じ、アダム・スミスの『国富論』以前に執筆されたものであるにもかかわらず、その市場分析はスミスと同じくらいすぐれたものであるとピータスンは結論づけている。もちろん、現代のミクロ経済学で考察されるような限界理論は用いられておらず、時代の制約が存在することは間違いないが、それでもウォーレスのミクロ経済論はピータスンが考察するようにもっと評価をされてもいいであろう。

「食料の価格と食料不足について」は穀物法の議論ゆえに、食料を増産させることが議論の中心となっている。ピータスンはそこに注目したため、ウォーレスは農業を重視し、製造業を批判したと考察しているが、ウォーレ

10) ピータスンはここに脚注とつけ、以下のように述べている。この問題は Salim Rashid の “Smith, Steuart, and Mercantilism: Comment,” *Southern Economic Journal* (January, 1986), pp. 843-852 でまさに扱われたものである。

スは決して奢侈品を全面批判したわけではない。『人口論』でも『諸特徴』でも同様の見解を示している。

「食料の価格と食料不足について」ではウォーレスの穀物法の議論にとどまらず、救貧法や人口論など多角的な視点から議論されている。このような彼の議論がほかの著作とどう関連するのか、また、ほかの著作でも、彼のミクロ経済的な考察が行われているのか、という新たな問題が投げかけられることになるであろう。「食料の価格と食料不足について」がこれまでの彼の経済理論とは異なる新しい彼の経済理論を提示することになったのは間違いないであろう。

参考文献

- Hume D. (1932) *The Letters of David Hume*, 2 vols., Grieg, J. Y. T. ed., The Clarendon Press.
- Peterson, D. J. (1994) 'Political Economy in Transition: From Classical Humanism to Commercial Society — Robert Wallace of Edinburgh', Ph. D. Diss., University of Illinois at Urbana-Champaign.
- Rashid S. (1986) 'Smith, Steuart, and Mercantilism: Comment', *Southern Economic Journal* (January, 1986), pp.843-852.
- Smith, A. (1776) *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, 2 vols., Campbell R. H. & Skinner A. S. eds., rep., Oxford University Press, 1981.
- 水田洋訳 (2000-2001) 『国富論』全4冊、岩波書店。
- Wallace, R. (1745a) 'An Address to the Jacobites in Scotland. In which among other Reasons offered to persuade them to acquiesce in the Revolution and the Settlement of the Crown in the Protestant Line it is proved that Scotland has not declined in Wealth since the Revolution but is richer att present than att that period', Edinburgh University Library, MSS., Laing II, 97/5.
- (1753) *A Dissertation on the Numbers of Mankind, in Antient and Modern Times*, Edinburgh, rep., Routledge Thoemmes, 1992.
- (1758) *Characteristics of the Present Political State of Great Britain*, London, rep., Augustus M. Kelley, 1969.
- (1761) *Various Prospects of Mankind, Nature and Providence*,

London, rep., Augustus M. Kelley, 1969.

———— (n.d.1) ‘Letters to, from John Stuart, 3rd Earl of Bute, G. Hamilton, D. Hume, R. Hunter, K. Mackenzie, C. Mackie, James Douglas, 15th Earl of Morton, W. Strahan, John Hay, 4th Marquess of Tweeddale, R. Whytt and G. Wishart. Mainy about his Dissertation on the numbers of mankind’, Edinburgh University Library, MSS., Laing II. 96/1.

———— (n.d.2) ‘Of the Prices and Dearth of Provisions in different Numbers Referring to One Another’, Edinburgh University Library, MSS., Laing II 620/11.

中野力 (2007) 「ロバート・ウォーレスの『人口論』と『諸特徴』との関連について —— 1745 年草稿を中心に —— 」『マルサス学会年報』第 16 号、99-123 頁。